

出版 DX（デジタルトランスフォーメーション）としての大学における電子書籍制作と電子図書館公開

湯浅 俊彦（追手門学院大学 国際教養学部）

概要

本稿は、出版 DX の観点から、大学の授業における学生の成果物の電子書籍化と電子図書館による公開を検討するものである。多くの大学が導入している LMS（Learning Management System=学習支援システム）に提出された大学生のレポート課題などは、単に担当教員に提出され、採点されるだけでなく、学生の成果として保存、利用されることが望ましい。そこで「電子書籍制作システム Romancer」を使って、学生が Word 文書で書いた書評、ゼミ論文などを「電子書籍化」する追手門学院大学の実証実験を検証した。その結果、学生による電子書籍制作は、本は特別な才能を持った著者が著すものという学生の本に対する見方を大きく変化させ、「本を読む」から「本を書く」「本を作る」という出版 DX の可能性を拓くことが明らかになった。

キーワード 出版 DX、電子書籍、電子図書館、LMS、追手門学院大学

1. 研究目的

本研究は、出版 DX（デジタルトランスフォーメーション）の観点から、大学の授業における学生の成果物の電子書籍化と電子図書館による公開の意義を検討するものである。

事例として 2021 年 2 月から開始された追手門学院大学における電子書籍制作システム「Romancer Classroom」（ボイジャー）による EPUB3 ファイルの電子書籍制作、そして電子図書館サービス「LibrariE」への登録とクラス内限定公開、学内限定公開、一般公開について取り上げ、図書館利用者による「本を読む」から「本を書く」「本を作る」への移行が出版 DX を促進し、新たな出版活動の展開につながる可能性があることを明らかにする。なお、「Romancer クラスルーム」は「Romancer」¹を教育現場で活用するために開発された新たなサービスである。

2. 研究手法

追手門学院大学における電子書籍制作システム「Romancer Classroom」の活用事例を精査し、学生が自ら電子書籍制作を実践することが、出版メディア利用の活性化に与える影響について検証する。具体的には大学の授業科目「日本語ワークショップ」の受講生に電子図書館の中から好きな 1 冊を選び、他の受講生が読みたくなるような図書の見出し文を書くことを課題とした。その見出し文を他の受講生が読み、コメントを書いて、見出し文とコメントをクラスの人数分だけ集約して 1 冊の図書の原稿として、これを EPUB3 による電子書籍化を行い、電子図書館に登録し、学内限定公開とした。このようにして制作された電子書籍 1 冊をもとに受講生によるグループディスカッションを実施し、本を作ることによる出版メディアに対する意識の変化を検証した。

3. 追手門学院大学の事例研究



写真1 Romancer クラスルーム



写真3 制作した電子書籍



写真2 Romancer クラスルーム「作品の編集」

詳細は当日の配布資料、参照のこと。

4. 結果の知見

これまで紙媒体を中心に発展を遂げてきた出版メディアは、電子出版による生産、流通、利用、保存と

いった局面に転換しつつある。それは単に紙媒体の出版メディアが電子媒体に置き換わりつつあるというだけでなく、出版社、取次、書店といった近代出版ビジネスにおける機能と役割を大きく変化させ、近代出版流通が担った物流システムとは異なる新たな「情報流」システムを生み出し、販売と購買から利用権の新たな契約へと変容することとなった。また、電子出版・電子図書館普及に伴う著作権法など法制度の整備、音声読み上げによるプリントディスアビリティへの対応など、さまざまな「出版 DX」が喫緊の課題となっている。

本研究は、そのような出版における DX（デジタルトランスフォーメーション）の一局面である著者と読者の関係性を改めて問い直す問題意識から始まっている。そして、実際に大学生が電子書籍の制作を実践し、「本の読み手」であった読者の側が「本の作り手」になることによって、より積極的に出版メディアに関心をもつ可能性があることが明らかになった。「読む」から「書く」「作る」という変化は能動的な新たな「読者」の誕生を示唆しているのである。

5. 今後の課題

2021年から開始した追手門学院大学における電子書籍制作システム「Romancer」を活用した「電子書籍制作」はまだ始まったばかりである。したがって、タイトル数も少なく利用頻度もこれから伸びていく途上にあるとあってよいだろう。今後、「独自資料」のアップロードによって、アクセス数の制限のないタイトルが一気に伸びていくことが予想され、従来の図書館の商業出版物が中心という資料構成の概念が変化していくだろう。このことは今後、改めて詳細な調査を行い、研究を深めたいと考えている。

¹ ボイジャー「Romancer」<https://romancer.voyager.co.jp/>（参照：2021-10-15）